噂の側室

ジグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
噂の側室

【Ｎコード】
Ｎ８２３５Ｚ

【作者名】
ジグマ

【あらすじ】
王城で囁かれている噂は、見た目以外芳しくないものばかり。
そんな悪名ばかりが目立つ側室の話。

はじまりの噂

【東のフォレスタ国】

と聞けば、知っている者ならば皆こう言うだろう。
とても緑が豊かで資源が豊富な国、と。
町は貿易で栄え、どこか古き街並みを感じさせる城下町はとても温かい雰囲気だと。

そしてもう一つ。
唯一悪い噂もある。
それは側室、レオナ・フライトだ。

緩やかに波打つ艶やかな黒髪、少しだけ吊り上がった大きな瞳は優雅な瑠璃色。
肌は陶器のように白く滑らかできめ細かく、紅をささずともほんのり色づいた唇は艶がありふっくらとしている。
姿に関してはまったく問題はない。むしろ数いる側室の中でも飛びぬけて可愛らしい容姿だったりする。

血筋もいい、なんせ先々代の国王がずいぶんと年を召してからひそかに生ませた庶子だ。
まあ母親は庶民ではあるが、直系の血を引く娘は多くはない。
年は今年で１８歳になり、老いているわけでもない。

ではなにが問題なのか、それは間違いなく彼女自身だ。
派手な顔つきに見合った煌びやかなドレスと宝石を常に身にまとい、

夜会があればさらにその豪勢さに磨きがかかる。
それも一度着たものは2度と着ないという徹底ぶり。
宝石に関してもしかりだ。
他の側室たちには「贅沢が生き甲斐では？」といわれている。

とはいっても彼女はあまり奥の離宮から出てくることはない。
だがまたそれが怪しいと、噂に拍車がかかっている。
国王以外の男と褥を共にしている、気に入った近衛を囲っているなど、さまざまな憶測が飛び交っている。

ついでにその食欲もまたすごいという。
朝夕は一食でいいというが、昼食はなんと１０人前を平らげてしまうという。
小柄な彼女のどこにそんな大量の食事が収まるのか、宮廷ではもっぱらの噂だった。

そんなレオナ・フライト。
フォレスタ国王の側室。
いい噂はほぼない。

この物語の主人公である。

噂と実状？

レオナ・フライトといえば、王城での噂はもっぱら悪女やら贅沢妃やら、そんなのがほとんどの側室だ。
まれに姿形だけはいい、といわれることもある。
まあ「だけは」というところが、単に褒めている言葉ではないとわかるだろう。
着飾ることをなによりも愛する少しおつむの弱い側室だと、周りはひそかに声を合わせて彼女を笑う。

そんな彼女の朝は、他の側室より早い。
本来侍女付きの身分の高いものは、彼女らが起こしに来るまでベッドから出ないものだが彼女は違う。
侍女が来る前に自らクローゼットを開けて、その日のドレスから髪飾り、アクセサリー、靴その他小物全般を選ぶことから始まる。
何度もレオナ付きの侍女がそのような真似はしないでほしいと言っても、彼女は頑として首を縦に振ることはなかった。

「さて、今日はどうしましょう」

今日も侍女がやってくる前に起床し、開けたクローゼットの前にレオナは立っている。
目の前にかかっているドレスはたったの5着。
午前中に公務があるから、特に煌びやかなものを選ばなくては。
しかも今日の公務は国王の隣に立つのだ、いつも以上に気をつけねばならない。

「ドレスはこれでいいわね、あと靴は…、髪飾りはどれがいいかし

ら」

靴も髪飾りもアクセサリーすらも、贅沢妃といわれるほどの数は持ち合わせてはいなかった。
どれも両手で足りるほどの数で、彼女は悩みつつも選んでいく。

選んだ一切をドレッサーの前のテーブルに置く。
今日はとても晴れていて日差しが眩しいから、それに合わせて白色をメインにコーディネートしてみた。
真珠と繊細なレースをふんだんに使った光沢のあるドレスに、同じく真珠をあしらった髪飾りとピアス。
首元にはレオナの瞳と同色の、大粒のラピスラズリのついたチョーカーを。
少しでも低い背をカバーするために、靴はヒールの高いものにした。
ついでにこれなら脚を長く美しく見せることもできる。

いくぶんシンプルな気もするが、たまにはこういった素材を生かした服装もいいだろう。
もともとレオナはシンプルなほうが好きだ。

時計を見ればまもなく侍女がやってくる時間だ。
そのときを待ちつつ、レオナは自ら櫛を取り髪を梳く。
少し癖のある髪ながら、毎日寝る前にローズオイルを染み込ませているので絡むことなく滑らかに櫛が通る。
自分の衣服を選ぶことと同様に、髪梳きも彼女の大事な一日の習慣だった。

一櫛梳くたびに、レオナは自身に言い聞かせる。
これからはじまる一日は、【側室、レオナ・フライト】なのだと。

噂と実状？

コンコンと控えめに扉をノックする音が聞こえた。

レオナは髪を梳いていた手をゆっくりと止める。
目を閉じ、これからはじまる一日をすでに疲弊したといわんばかりに嘆息してから、意識を切り替えるようにあえて明るい声を出す。
唯一の長所と噂れている綺麗な顔に、他者を惹きつける妖艶な笑顔を貼り付けることも忘れない。

「どうぞ、お入りになって」
「失礼します。レオナ様、おはようございます」
「おはよう」

静かに扉が開けられ、現れたのは侍女だ。
レオナが側室として王城に上がってからの約半年の付き合いだが、典型的な主従関係だけで友人のような気安さはない。
レオナは彼女に心を開こうと思っていないし、侍女もそうだろう。
お互い挨拶や必要な事柄を言うだけで、それ以上話すことはほぼない。

「またそのように自ら衣装をお選びになって…、それらはわたくしたち侍女の仕事にございます」
「こればかりは譲れないわ」

この会話も必要なこと。
側室として、身分の高い人間のすべきことではないとやんわりと指摘する。
それに主が首を縦に振るかはまた別問題だが、侍女の仕事だ。

けれどさすがにこの会話を数ヶ月毎日やれば、相手も諦めてきているようで、それ以上なにもいうことはなかった。

侍女が引いてきたワゴンには朝食が乗せられていて、いい匂いが部屋を満たす。
侍女はそれらを手際よくテーブルに並べ、紅茶を淹れる。
レオナがストレートティーよりもレモンティーが好きだと知っている彼女は、スライスしてあるレモンとハチミツを紅茶に入れた。

優雅に手を伸ばし、レオナはクロワッサンを一つ取る。
焼き上がってまもないようで、小さく千切ればバターの香りをたっぷり含んだ湯気が立ち上がった。
一口いれれば、さくさくとした感触と焼き立ての甘さが広がる。

ずいぶん前に「とても美味しい」とつい漏らしてから、よく朝食に上がるようになった。
たぶんその呟きを聞いた侍女がコックに伝えたのだろう。

朝食もそこそこに、レオナは少し冷えてしまった紅茶を飲み乾した。
後片付けをする侍女を見つつ、口を開く。

「今日の午前、陛下とご一緒の公務がありますの。陛下のためにも、お化粧はいつも以上に念入りにお願いしたいのだけど」
「専属の化粧師に、そのようにお伝えいたします」
「ありがとう。きっと陛下の御心を捉えてみせますわ」

少し頬を染めて、いかにも陛下に会えるのが楽しみだといわんばかりの顔をした。

ただ着飾って、その見目麗しさで国王の寵愛を得ようとする。
賢いとはとてもいえそうにない、姿形だけを気にするレオナはまさしく、噂のおつむの弱い側室だった。

噂と実状？

ただいま午前８時３０分。
午前中に予定されている、レオナの公務は９時から約１時間ほどだ。
その内容は謁見の間にて国民――そのほとんどは貴族だが――からのさまざまな要望、要請を聞くこと。

この公務は週７日のうち６日行われていて、国王と王妃――現国王にはまだ王妃がいないため側室――が出席するのが決まりだ。
ちなみに離宮に暮らす側室はちょうど６人いるので、毎日ローテーションでこの公務をこなしている。
今日はレオナが国王とその公務をこなす日だった。

すっかり身支度を整えたレオナは、落ち着かない様子で自室をうろうろ歩き回る。

レオナ本人選んだ純白のドレスは、見事に彼女の魅力をこれ以上なく引き出していた。
真珠とレースをあしらった髪飾りは、彼女の緩やかに波打つ黒髪を品よくまとめ上げている。
細く白い首筋には、大粒のラピスラズリが輝く繊細な作りのチョーカー。
目鼻立ちがすっきりとしているレオナの顔は、化粧を乗せることでさらに美しさが増していた。

傍には侍女が控えていて、そんなレオナを不躾にならない程度に見遣っている。
が、あまりのその様子を見兼ねたのか、侍女は口を開いた。

「…ハーブティーでも淹れましょうか？」

それは暗に『いい加減に見苦しい、落ち着きなさい』と示す言葉に違いない。

このフォレスタは、自然の多さや資源の豊富さだけではなく、教育体制も整った非常に安定した国だ。
男女問わず最低限の教育――読み書きは義務として、町の教会や修道院にて無償で受けられる。
そんな秩序や情緒を重んじるこの国では、知性あふれる女性が男性に好まれるのは必然というべきか。

寡黙ながらも臣下から信望される、現国王の女性の趣味もそうであろうともっぱらの噂だ。
着飾ることをなによりも気にし、おつむが弱い娘などもってのほか。
けれどレオナは、そんなことには気づいていないというふうに侍女に眩しいくらいの笑顔を向ける。

「いいえ、けっこうよ。ああ、陛下にお会いできるそのときが待ち遠しいわ」

侍女はもうなにも言わず、主に気がつかれないように嘆息するばかりだった。

結局レオナは、公務までまだ２０分もあるというのに謁見の間に出向いた。

今にも飛び立ちそうな、傍から見ても浮かれた彼女の足取りは、淑女というにはまだ早い幼い娘のようだ。
仮にも側室の一人であるのにと、すれ違ったメイドや大臣たちは表面上は挨拶こそするが、内心は彼女を笑うばかりだった。

あとこの空中廊下を進み、階段を下りれば謁見の間だというところで、向かいから国王が歩いてくるのが見えた。
背後に宰相たちを引き連れて、なにやら話しながら歩いている。
やがてレオナに気がついたようで、国王は足を止めれば続いていた臣下たちもその歩みを止めた。

一週間ぶりに会った国王は、記憶の中のものと寸分違わぬものだった。
年はたしか２４になると記憶しているが、正直とても年相応とはいえないと思う。
むろん精悍な顔立ちは非常に男性的で、魅力的だとは認めざるを得ないが。

きっと国王ならではの圧倒的な威厳が強すぎるのだ。
落ち着いた風格はとても２０代のものとは思えず、加えて寡黙な態度がさらに年齢を引き上げているのだろう。
色素の抜けたような亜麻色の髪と金緑の瞳は、若干その印象を和らげてはいるようだが、あまり効果はないようだった。

「おはようございます、陛下」

レオナは妖艶な笑みを浮かべて、国王に走り寄る。
細い腕を広げて柔らかく抱きしめ、自分より頭一つ背の高い国王を、彼女は熱を帯びた瞳で見上げた。

国王の後ろに控えた宰相らが、レオナの態度に眉をひそめる。
「人前で、しかもただの側室の一人がそのような態度はいかがなものか…」といわんばかりだった。
レオナはそんな彼らにすら、どことなく勝ち誇ったような笑みを返し、国王に這わせた腕にさらに力を込める。

「お会いしとうございました」

国王はなにも言うわけでもなく、形式的にそっとレオナの抱擁を返すだけだった。

噂と実状？

午前中の公務はあっという間に終わり、国王との会話もそこそこにレオナは自室に戻った。
帰りを迎えてくれた侍女には、
「少し気分が悪いからしばらく休みます。昼食も用意しなくていいわ」
といって下がらせ今は一人だ。
午後の公務は、ディナーを交える他国との交流目的の夜会が一つある。
けれどそれまでは自由だったと記憶している。

「それじゃあ公務まで数時間、【側室のレオナ・フライト】はおやすみね」

躊躇いなく真珠をあしらった髪留めを外せば、見事に結い上げられていた黒髪はあっけなくレオナの肩を覆った。
髪留めをドレッサーに置いて、今度はクローゼットを開ける。５着しかないドレスで隠すようにしまわれていた少し大き目の箱を取り出した。
近くのテーブルにそれを置いて、蓋をあける。

そこには今レオナが着ているドレスとは素材から違う、簡素で地味なその衣服とその一式。
離宮で働く侍女の制服が入っていた。

これは誰にも知られてはいけないレオナの秘密だった。
毎朝彼女が自ら衣装を選ぶのもこのためだ、この箱の存在を侍女に

知られてはならない。
無論この側室としては少なすぎる衣装の数も知られてはならない。

レオナは器用に着ていたドレスを脱ぐと、箱にしまわれていた衣装に着替え始める。
ドレスとは違い簡素な作りゆえ、一人でも簡単に着こなせる。
飾り気がないグレーのブラウスに、黒のベスト。裾に少し刺繍の入ったひざ丈の黒いスカートに、黒いタイツ。デザインよりも実用性を重視した皮靴はとても歩きやすい。
最後に邪魔にならないよう髪を簡単に編み込み、白いエプロンをすれば完璧だ。

ドレッサーの隣に置かれている姿鏡で、一応その姿をチェックする。と、化粧を落とすのを忘れていた。
部屋に続く洗面所で、いつも以上に綺麗な仕上がりを頼んだ化粧をためらいもなく落とす。

近くのタオルを手にとって顔を拭けば、もう妖艶な笑みと化粧で他者を惑わすようなレオナはいなかった。
あるのは作られた側室のレオナではなく、ただのレオナの――年相応の純粋に愛らしい――顔。

さすがにすっぴんでは天気のいい今日は日差しが強いので、化粧水と乳液をなじませる。
唇にはほんのり色のついたリップクリームを塗ればもう十分だった。

すっかり侍女に化けたレオナは、辺りを見回してから自室を出る。
足早に部屋を離れて、まずは調理場に向かった。

そろそろ昼食の支度がはじまるのだろうか、調理場は少しあわただしかった。

「おはようございます、スレイさん」

「お、どうしたレナ。またレオナ様からのお使いか？」

カウンター越しに厨房をのぞけば、すっかり顔なじみになったコックがいた。

スレイという名のコックは、野獣のように大柄の男だった。年は５０を過ぎたあたりくらいだろうか。

ボールでなにやらかき混ぜながら、スレイはレオナ――もといレナのところまでやってきた。

「はい、昨日お願いしておいたクッキーを受け取りに参りました」

「ああ！　あれな、用意できてるぞ。ちょっと待ってろ」

抱えていたボールを調理台に置くと、スレイは奥に姿を消した。

しばらくして戻ってきた彼の右手には、木のツルで編まれた大きめのバスケットが、左手には数枚のクッキーが乗った白い皿があった。

うち差し出されたバスケットをレナは受け取る。

「ほれ、これだ」

「ありがとうございます」

「んで、これはお前さんの分だ」

「え？」

数枚のクッキーが乗った皿も差し出された。

目を丸くするばかりのレナに、スレイは笑いかける。

「甘いもの好きだろう？　顔がにやけとる」

スレイの言葉に、レナは反射的に自分の顔に手をやってみる。
けれど分かるわけもない。
なんだか恥ずかしいと俯いたレナに、笑いながらスレイはお茶を出す。

「少しくらい時間あるだろう？　御側室様の派手なお茶会とは天の地の差だろうが、食う間は息抜きしていけ」
「それじゃあ少しだけ…。それと一つ訂正させていただきます、わたくしはこういった雰囲気のほうが好みです」
「こんなおっさんと茶してもつまらんだろうが」
「無理に着飾った堅苦しいところよりも、気楽でいいと思いますわ」

にっこり笑って、クッキーを一つ頬張る。
プレインとココアのマーブルクッキーは、バターの甘さとカカオのほろ苦さが絶妙だ。
淹れてもらった紅茶も最高級茶葉とは違うが、優しい味はほっとする。
ついつい手の進むレナを、スレイは満足そうに見ていた。

ふとそんなレナの手が止まる。

「あ…スレイさん、一つレオナ様から言付けを承って参りました」
「おう、なんだ？」
「明日の昼食はまた１０人前お願いしたいそうです」
「了解～」
「よろしくお願いします」

それにしても、とスレイが首をかしげる。
野獣のような巨体の彼が顎に手を当てて考える仕草は、その見た目と違いとても可愛らしい。
くすりと笑うレナに気がつくこともなく、スレイはさらに呟く。

「あの細いレオナ様のどこに、そんだけ入るんだかなあ…」
「あら、それでもまだ足りないこともある、とおっしゃっておられましたわ」
「まじかよ、俺よりすげえ腹なんだな」
自ら腹を揺するスレイの仕草に、今度は声を出して笑ってしまった。

噂と実状？

スレイとのゆったりとしたお茶会を楽しんだ後、レナは彼から貰ったバスケットを抱えて離宮から王宮へと足を運んでいた。
侍女の姿の今は、誰にとがめられることもなくあっさりと城下町に続く門までたどり着く。
門兵に主から城下町まで買い物を頼まれたといえば、簡単に出してもらえた。

城下町までの道を歩きつつ、レナは振り返る。
王城とこの城下町をつなぐ石作りの大きな門は、２階建ての家よりよっぽど高い。
レナより大きな石を何個も重ねて作られていて、城というよりも要塞のような重苦しさがあった。

違う。牢獄のようだ、とレナは思う。
少なくても自分にとっては、牢獄そのものだと思う。
それでもそこで生きていくしかないレナは、苦々しい思いに顔をしかめる。

今はまだ無理だ。
飛び出すにはまだまだ準備が足りなさすぎる。
側室にと王城に上がって早半年、これだけ時間をかけてできた準備はこの侍女服を手に入れたことだけだ。
まだまだ時間はかかるだろうが、一生ここにいるつもりもない。
抱えるようにバスケットを持つ手に、無意識ながら力がこもる。
あの城に、自分の味方はいない。

少なくても【側室レオナ・フライト】にはいない。
否、つくらない。
出ていくときは一人でいいと、ここに連れてこられたときに決めたから。

レンガで舗装された城下町への道は歩きやすく、２０分も歩かぬうちに到着した。
貿易で賑わう町は、王城の雰囲気とは全く違う。
王城は厳かな雰囲気ばかりだが、町は常に活気に溢れていて、きちんと人がここに居て生活しているのだと感じられる。

もともとレオナは修道院暮らしで、王城の生活に近い静かで落ち着いた毎日を主としてきたが、こういった雰囲気も好きだった。
今は特に【側室、レオナ・フライト】として我慢を要する生活をしているせいか、開放的な町の雰囲気に惹かれるのだろう。

賑わう市場を眺めながら、レナは町から少し外れた場所に向かう。
なだらかな小麦畑を過ぎ、のんびりと草をはむ牛たちの牧場を過ぎ、やがてそれは見えてくる。
古めかしいデザインながらも、どこか荘厳なその建物。
高い屋根の上に掲げられた十字架は、ここが教会だと示していた。

そのまま表から入ることをせず、レナは裏に回る。
頼りない木の柵の扉を開け、裏門をたたく。
まもなく出てきたのは、ここの神父である初老の男性だった。

「こんにちわ、神父様。本日もよろしくお願いします」
「ようこそ、レナ様。こちらこそよろしくお願いします」

にこやかに笑う神父に、レナはもってきたバスケットを差し出す。

「子供たちのおやつにとお持ちしたのですが、受け取っていただけますか？」
「ありがとうございます、きっとあの子らも喜びます」
「そういっていただけると、こちらも嬉しいです」

さあどうぞと、神父はレナに中に入るように勧める。
その穏やかな神父の雰囲気に、王城に来る前の生活を思い出してなんだか切なくなった。

噂と実状？

教会の誰もいない奥の一室で、レナはまた着替えをしていた。
今度は侍女の制服から、修道女が着る白いブラウスと黒いワンピースだ。
すっきりしたデザインは動きやすく実用的で、城で着ているドレスなんかよりもよっぽどいいと思う。

そそくさと着替えを済ませたレナは、そのまま礼拝堂に足を運ぶ。
まもなく昼になろうという時間の今は、さすがに誰もいなかった。
正面に置かれた母なる女神を模した石像に、天窓から差し込む光が当てられているこの空間はひどく神聖だ。
女神を前に膝を折り、レナはしばし祈りを捧げる。

やがて顔をあげたレナは、窓の外に視線を向けた。
この教会の建物に続くように増設されたそれは、孤児院だ。
いつもなら子供たちの声が聞こえてくるのだが、今はまったく聞こえない。
ちょうど昼食の時間なのだろう。
今日はどんな授業をしようか、そんなことを考えながらレナは孤児院のほうに歩きだす。

案の定、ちょうど昼食時だったようだ。
食堂をこっそり覗いたら、ここで暮らす子供たちが行儀よく座って食事をしていた。
まだ一人で食べられない子には、年長の子がそばについて面倒を焼いている。

邪魔してはいけないと、レオナはその場をそっと離れ、いつも授業で使う講堂に向かう。
板張りの廊下は、レオナが歩くたびに少し軋む。

ふとさっきの食事の場面が浮かんで、なんだか少し羨ましくなった。
王城に上がってから、レナの食事はほとんど一人だ。
他の王族貴族たちとの会食は何度もあったけれど、お世辞や自慢ばかりが話題に上って食事を楽しむどころではない。
温かい雰囲気など微塵もなく、いつだって湿ったようなどろりとした雰囲気だ。
必要以上の香水と化粧の香りに、食欲など起こるわけもない。

つくづく自分は、あの王城で繰り広げられる毎日は合わないのだと思う。
贅沢など好きではない。必要以上の物もいらない。
穏やかで地味な生活が好きだ。静かに暮らしたい。
それでも耐えねばならない現実には、奥歯を噛みしめるしかなかった。
必ずあの生活から抜け出してみせる、今はまだ弱音を吐きそうになる自分を叱咤して前に進むしかないのだ。

半刻ほど経って、レナのいる講堂に向かってくる足音が聞こえてくる。
一人や二人ではない多さから、食事が終わって皆がこちらに向かってきているのだと察した。
頃合いを見計らって、神父がレナが来ていると子供たちに伝えたのだろう。

「レナさまー！」

癖っ毛の栗毛を揺らして、一番手に顔を出したのはルーフという少年。年はまだ６つだ。
元気よくこちらに走ってきて、そのままレナに飛びつく。
もともと母子家庭だったというルーフは、レナに母親を重ねているようでとてもよく懐いている。
そんなルーフに続けといわんばかりに、講堂に入ってきた子どもたちはレナのもとに集まってきた。

「ルーフずるい！！」
「こんにちはレナ様！　今日はいつまでいれるの？」
「レナさまー、今日はどんなお勉強するの？」
「みてみて！ちゃんと宿題やったんだよー！」

それぞれに言葉をかけてくる子供たちに、嬉しいながらも少し困ったように微笑む。

「待ってちょうだい。わたくしの二つの耳では、こんなにたくさんの会話はきちんと整理できないの。みんな一度、席についてくれる？　一人一人とお話がしたいわ。授業は全員とのおしゃべりが終わってから始めましょう」

にっこりと笑ってそういえば、子供たちは大きな返事とともに各々の席に座り始めた。
子供たちから向けられる視線からは、レナとおしゃべりできる嬉しさが見てとれる。
必要としてくれてるんだと、溢れそうになる温かさを感じていた。

無論これもレナの――レオナの秘密の一つ。
レナという名で城下町にあるこの孤児院で、彼らの教鞭をとっている。
最初に彼女がこの教会にやってきた理由は別だったが、そのとき少し子供たちに勉強を教えたのがきっかけになって、今では公務がない日や空いた時間を使って足を運ぶまでになっていた。
もちろんこの穏やかな休息こそも、なんとか【側室レオナ・フライト】を演じ続けられる理由の一つだとレオナは自覚している。

噂と実状？

楽しい時間とは、あっという間に過ぎるものだ。
あれから個人個人と話をして、読み書きと計算の授業をして。
おやつの時間になって、レナがもってきたクッキーを子供たちと一緒になって食べている。

「レナさまお茶のおかわりいかがですかー？」

少し気取った感じでルーフが聞いてくる。
大きめのティーポットを抱えたルーフは可愛らしくて、レナは微笑みながら「お願いします」とティーカップを差し出した。
結局少し零れてしまったおかわりだったが、当のルーフは満足したようだ。

「はい、どうぞ」
「どうもありがとう」
「お味はいかがですか？」

レナは一口お茶を飲む。
王宮で扱われている茶葉とは比べ物にならないが、修道院にいたことはよく飲んでいたお茶だ。
少し渋みがあるが、すっきりとした味わいに懐かしさを覚える。

「とても美味しいわ。ルーフはお茶を淹れるのがとても上手なのね」

レナがそういうと、ルーフはほっとしたように笑った。

ふと窓の外を見ると、太陽がいくぶんか傾いていた。
まだ夜会まで時間はある。
準備に要する時間を考慮しても、もうしばらくは…、とここで気がつく。
今日夜会に着る予定のドレスは、町の庶民が利用する呉服屋に出したままだった。

【側室レオナ・フライト】のドレスが毎度違うデザインだと噂されているのはここにある。
王宮から定期的に与えられるドレスの大半を呉服屋に出して、毎度デザインが変わるように新しく仕立て直してもらっているのだ。
アクセサリーやその他の衣装の数が少ないのは、代金として受け取ってもらっているせいだ。

側室としての彼女の私財のほどんどは、王宮付きの貴族が愛用している仕立屋にアクセサリーやドレスを作らせていると噂させて、実際はこの孤児院の経営に回してしまってほとんどないのが現状だ。

レナは急いで立ち上がる。
呉服屋はこの孤児院から少し離れていて、もう出なくては夜会の時間までに間に合わない。
レナの様子に子供たちが敏感に勘づく。

「レナさま、もう帰っちゃうの…？」

ルーフがしょんぼりとレナに問う。
他の子供たちもルーフと同じことを問うているような眼をしている。
ここの子供たちは『置いていかれる』ことがトラウマなのだ。
彼らは家族に置いていかれたために、ここで暮らしているのだから。

「ごめんなさいね」

それでもレナもいかなくてはならない。
ここに残りたい気持ちは強いが、レナも本当の自由を手に入れるまで逃げるわけにはいかないのだ。
すっかりしょげてしまった子供たち一人一人にレナは柔らかく抱擁する。

「必ずまた時間を見つけて会いに来るわ。だからいい子で待っていてくれるかしら？」

後ろ髪を引かれながらも、レナはここに来たときに着替えた部屋に向かい、また侍女の制服に着替える。
早くこんな生活は脱出したいと、強く思いながら。

孤児院を後にして、呉服屋で頼んでいたドレス3着の入った大きな黒い箱を受け取る。
城に戻る頃には、道に伸びるレナの影はだいぶ長くなっていた。
孤児院を出たときよりも、太陽がずいぶん傾いている。
熟れた果実のような、少し解けたようなその輪郭は、まもなく地平線に姿を隠すぞといわんばかりだった。

黒い箱を抱え直して、少し急ぎ足で城へと戻る。
ようやく王城へと続く門にたどり着き、門兵に声をかければすぐに開けてくれた。
レナが持つには大きすぎる箱に、門兵が興味を持ったようだ。

「なにが入っているんだ？」
「ドレスです。レオナ・フライト様に頼まれまして、町にある王宮付きの仕立屋まで取りに行って参りました」
本当は王宮付きの仕立屋ではなく、庶民が利用する呉服屋だが。
噂にはもっと背びれや尾びれがついてもらわないと困る。
嘘をつくことに罪悪感を覚えつつも、嘘も方便だと無理やり自分を納得させる。

「ああ、あの側室の」
「はい、今日の夜会用のものらしいです」
「夜会か、そりゃあの噂の側室様ならしっかり着飾りたいだろうよ」
「侍女のわたくしもよくレオナ様のお噂は聞きますが、門兵さまの間でも噂になっていらっしゃるの？」
「俺らの中じゃ傾国の美女って呼ばれてるぜ」
「まあ、ぴったりな噂かもしれませんわ」

まさかその本人が目の前にいるともしらず、門兵は笑う。
レナはその様子を、それでいいのだと合わせるように笑った。

門兵に手を振って別れたレナは、少しずつ計画が進んでいると確信する。
つい嬉しさにほころぶ口元を持つ箱で隠しつつ、【側室レオナ・フライト】の――自室へと急ぐ。

動き始める噂――…の少し前

王城の最上階、そこに現国王の執務室がある。
石作りの壁はそのままむき出しで、床には隙間なく真っ赤な絨毯が敷かれている。
国王が使う机は、黒曜石でわざわざ作られた特注品。
その机の上には束になった書類の山が、小さな山脈を作っていた。

「おーい、陛下。フォレスタ国王陛下。…聞いてんのか、クライスト」

処理をしても一向に減らない書類から、しばし現実逃避をして夕日を眺めていたら、砕けた口調で名前を呼ばれた。
声の方向に視線をやれば、毎日顔を合わせている男と目が合う。

自分と同じ亜麻色の髪の男、名はダリルという。
クライストの腹違いの弟であり、国務大臣であり、2年前まで王位継承権を持っていた王子。
『持っていた』と過去形なのは、ダリル自らが放棄したせいだ。
曰く、「人の上に立つより、他人を支えるほうが性に合っている」だそうだ。

国王のクライストを敬称なしで呼べるほど――無論2人のときだけだが――、彼ら兄弟の仲はいい。

「…ああ、すまない。なんの話だったか…」
「今日の夜会のことだ。例の話、そこで公にするんだろ？」
「例の話…？」
「ほら、王妃云々のあれだ」

「…ああ、その話か。そのつもりだ」

少しぼんやりとしたクライストの反応に、ダリルは大げさに溜息をつく。

「なんだよー、そんなんで大丈夫なのか？　ずいぶん疲れてるんじゃねえの？」

「ここのところ書類整理が忙しくてな、一昨日からほとんど寝てない」

「うへえ…、さすが国を治める国王様。ハードなことで」

「多少の無理も国王の義務だ」

「ほんと根っからのクソ真面目だよなー、クライストは」

「真面目…か」

真面目、なのだろうか。

物心ついたときから国王になるのだと周囲に言われ、国王としてあるべき態度を叩きこまれ、国王としてのあるべき学を身につけさせられただけだ、と思う。

周囲の期待に黙って応えることが真面目だというのならば、自分は真面目なのかもしれない。

無論この生活に息苦しさを感じることもある。

無性に自由を渇望するときだってある。

だけどすべてを放り投げる覚悟もないだけだ。

ダリルは自分のなにを見て、真面目だといったのだろう。

うーん…といよいよ首をひねって考え始めたクライストに、「そういうとこが真面目だっていってんだ」とダリルが笑った。

動き始める噂？

王城とは別館にあたるこの巨大な大理石で造られたホールは、優に３千人は収容できる広さだろうか。
吹き抜けの高さは、いったい何階分相当するのか考えてしまう。
ホールの中央には壮大なシャンデリアが吊り下がっており、独特の温かみのある明りで周囲を照らしている。

ホールのあちらこちらで談笑の花は咲き、ホールの一角には各々多様な楽器を抱えた楽師たちが集まっており、常に曲を奏でている。
ガヴォットやミュゼット、メヌエットが流れ、その曲に合わせて着飾った男女は優雅に踊る。

また別の一角には立食スペースが設けられていて、カナッペ、オードブル、各種肉魚料理、サラド、デザートなどと豪華な料理が取り揃えられていた。
数人のウェーターが配置されていて、やってきた客人に素早く飲み物を差し出している。

まったく贅をこらした夜会だ。
もちろん他国にフォレスタの力を見せつける効果を見込んでいることくらいは理解する。
ただそれを楽しめるか楽しめないかは、個人の問題だ。

少なくても華やか過ぎて馴染めそうもないと、ホールの一角に咲く婦人たちの談笑に交じり、おつむの弱さを発揮しているレオナが思っているなど誰が想像しようか。
誰も想像などできまい。

あれから離宮にある自室に戻ったレナは、すばやく身に着けていた侍女の服を脱ぎ、この部屋の主でもあるレオナの表情を取り戻す。寝ていたと侍女には伝えてあったので、急いでシルクのネグリジェに袖を通し、その上からガウンを羽織る。
夜会まであと2時間だ。準備は滞りなく進めなくてはならない。

サイドテーブルに置いてあるベルを振る。
甲高い音が鳴り、まもなくその音を聞いた侍女が部屋の扉をノックする。

「お入りになって」
「失礼します。レオナ様、ご気分はいかがでしょうか？」
「もうすっかり良くなってよ。それでこれから夜会の支度をしようと思っているのだけれど」
「ではすぐに湯浴みの支度を始めます」
「ええ、お願い。ローズオイルをたっぷり垂らしてちょうだいね」
「かしこまりました」

侍女が部屋続きのバスルームに素早く向かう。
しばらくして湯を張る音が聞こえてきて、かすかにローズオイルの香りがレオナのもとに届く。
さて今宵も、人々が噂する通り【着飾り側室】【傾国の美女】として、より一層この名を馳せようか。

泣きだしたいほどの垢擦りを笑顔で乗り切り、いつも以上にきっち

り閉めたコルセットに何度も息が詰まったことか。
緩やかに波打つ黒髪は細やかに編み込まれ、妖艶な化粧を施してもらい、鮮やかな瑠璃色を基調に黒い繊細なレースが目を引くイブニングドレスで着飾ったときにはすでに、レオナはずいぶんと疲弊していた。

もちろんそんなことはおくびにも出さず、淹れられた紅茶を優雅に飲む。
すっかり表情を作ることに慣れたものだと自らを嗤うレオナを、侍女はきっと国王に会える喜び故の微笑みだと勘違いしたことだろう。

「ああ、早く陛下にお会いしたいわ」
「……夜会まで、もうしばしお待ちくださいますよう」

侍女の返答に若干の間があったのは、レオナのお決まりの言葉など聞き飽きたとでもいいたかったのか。
それきり口を閉じだ侍女に、申し訳ないけれどずっと騙されていてちょうだいと、罪悪感に苦しみつつもレオナは微笑むしかなかった。

空をくり抜いたように輝く満月が昇り始めた頃、本日最後の公務でもある夜会が始まった。
まさかその最中に国王と国務大臣のみが知りえる、とっておきの事態が起こるなど誰も知ることなく夜は更けていく。

動き始める噂？

たくさんの招待客が談笑に花を咲かせ、あるいはオーケストラに合わせワルツを踊り、あるいは立食スペースで舌鼓をうっている。
どの客人もフォレスタ国の接待に満足しているようで、夜会の雰囲気はとても華やかだ。

そんな中、笑顔こそは貼り付けているものの、背負う雰囲気がどんよりとした女性が一人。
瞳の色に合わせた鮮やかな瑠璃色のドレスがひと際目を惹くその女性は、間違いなくこのフォレスタ国の側室レオナだ。
レオナは立食スペースの豪勢な料理を前に、どうしたものかと頭を捻っていた。

悩む理由は一つ。
【側室レオナ・フライト】の噂の中に、彼女が大食漢であるということがある。
それをこの夜会で実演しようと思っていたのだが、どうにも食が進まないことだった。

いつも以上に絞められたコルセットと、孤児院の滞在時間を長くするために昼食を抜いたことが胃を縮小させてしまったのだろう。
普段の量よりもまったく食べられずにいる。
噂を確実にするには、これ以上の絶好の機会というのに。
ようやくオードブルを完食したレオナだったが、そのまま皿置いてしまった。

少しコルセットを緩めてもらおうか、そう思いレオナがホールから出ようとしたそのときだった。
突如巨大なホールに、穏やかながら低い声が響く。
談笑の花は一気に枯れ、踊りを楽しんでいたペアはそのまま立ち竦み、食を楽しんでいた者はその皿をテーブルに置く。
レオナを含め、このホールにいる全員の視線の先にいたのは、フォレスタの国務大臣でもあるダリルだった。
なぜか国王の隣に立っている彼は、陛下から一つ報告があるという。
その言葉に、王座に座っていた国王がゆったりと立ち上がる。
眩しい王冠を掲げ、深い藍色のマントを羽織ったその姿は、まさに絵本に出てくる王様といえる風格だ。

「今宵は、我が国が催す夜会をお楽しみいただけているようで光栄です。ここで私事ではありますが、一つ報告申し上げたく」

全身に視線を浴びているだろうに、まったく臆することもない。
それは隣にいる、元王位継承者でもある国務大臣も同じか。
国王の声は、ダリルのものより深みがありながらも、耳に馴染むような柔らかなものだった。

「かねてより、周囲から正式に王妃を娶るよう声が上がっておりました故、このたび迎え入れることを決意いたしました。つきまして側室の一人を、王妃に迎える所存であります」

淡々と国王は語るが、ホールは目に見えてざわめき始める。
あちらこちらから、「その側室とは誰ぞ」と王の言葉を前に推察する声が上がる。

セリア様か、リディル様か、はたまたファルマ様か。

無論その中にレオナの名前はない。
その様子にレオナは表面上だけ、慌てたような表情を貼り付ける。
そして誰も察しできないはずの、内心で王妃が決まったことにほっとした矢先。

なぜか、国王と目が合った。

ぞくっと背筋に冷たいものが走ったが、気のせいだと思うことにする。
【側室レオナ・フライト】の噂は国王にだって入っているはずだ。
悪評ばかりが目立つ女など、誰が王妃に迎えようと思うだろうか。
否、思うわけがない。

そう思うのに、溢れる不安耐えきれずレオナは国王から視線を外す。

動き始める噂？

ああ、なんだかとてつもなく息苦しい。
きっとコルセットがきついせいだ。
視界も鮮明とはいえない、少しぼやけて見える。

レオナは胸元に手をやり大きく息を吸うが、激しい動悸はまったく治まることをしらないようだ。
心臓が脈打つたびに、その音が脳を揺さぶっているようで気持ちが悪くなる。
水が飲みたい。
けれど足が、大理石の床に根を張ってしまったかのように動かない。

彼女が苦しんでいるのとは対照的に、ホールは水を打ったように静まり返っている。
皆息も殺しているようで、国王の言葉を今か今かと待ちわびている。
異様ともいえるその沈黙を破ったのは、沈黙を作った原因の国王クライストだった。

「側室のレオナ・フライトを、正式な王妃に」

その場が一気にざわめきだす。
ある者は純粋に驚きの声を漏らし、ある者は「まさかあの側室を？」と嘆き仰天し、ある者は側室として名をあげられたレオナに視線を投げる。
けれどこの騒ぎなど想定済みだといわんばかりに、クライストもダ

リルも涼しい顔だ。

そんなクライストに、顔を青くした宰相が壇上に上がってきて、おもむろに口を開く。

その様子からみて、宰相は嘆き仰天した口のようだ。

「恐れながら陛下。彼女とお決めになった理由をお聞かせ願えますか？」

「理由、とな。レオナはもとより側室の一人であろう？　それを改めて王妃として迎え入れることなど、さしておかしなことでもあるまい」

「それならば他の5人のご側室の方でも…」

どうか考え直してほしい、そう宰相の目は必死に訴えている。

よほどレオナがお気に召さないらしい。

けれどクライストも決めたことを覆すつもりはない。

「レオナでも問題あるまい。だいたいそなたらが日々王妃を迎えよと口うるさく申す故に決めたことぞ？」

「……たしかに何度も進言いたしましたが、しかし…」

「レオナでは不服である、と？」

「いえ…」

クライストが折れることはないと、察知してしまった宰相はもはや黙るしかなかった。

その様子に話は終わったといわんばかりに、彼は王座の置かれた壇上を下る。

いまだに終息しないざわめきなど聞こえぬといった顔で、王妃にと望んだ女のもとに向かった。

血の気を失った彼女を見るのは、これで2度目だ。
脅えも混じったような態度の彼女も悪くない。
寡黙な国王と噂されるクライストだが、悪趣味なところだってあるのだ。

国王がこちらに向かって歩いてくる。
堂々とした歩みで、彼はレオナの前までやってきた。
そして彼女を手を取り、その指先に口付ける。

「レオナ、王妃になってくれまいか？」
「……」

国王がその唇を離すのを、レオナは茫然と眺めていた。
周囲にいる人たちが、何か言葉を寄こしてくる。
だけど何も聞こえない。
国王もまだ何か言っているが、やっぱり何も聞こえない。

息苦しい。
呼吸が上手くできない。
目が回る、視界が霞む。
ああやっぱり、このコルセットがきつ過ぎるんだわ。

国王の言葉を無意識に拒絶したレオナは、そんな場違いなことを思いながらその意識を手放した。

動き始める噂？

なぜ、
王妃として、
悪評ばかりの自分が、

善政で国をまとめている、
稀代の賢王と謳われている国王に、
あろうことか望まれてしまったのだろう？

無意味に一区切りずつ考えたところで、答えが出るはずもなく。

一体何がいけなかったのだろうか、内面は最悪だと伝わっているだろうに。
聡い女が好みだともっぱらの噂だったのに、実は違っていた、とか。
作られたあの【側室レオナ・フライト】が好みだったとかだったら、どうしよう。

可能性がまったくないわけではない。
けれど別の可能性もある、と思う。
それは内ではなく外だった場合。

つまり、この外見だ。

母親譲りの美貌と小さい頃からいわれているこの顔は、非常に整っているらしい。
『らしい』というのは、レオナ本人が実母を思い出す顔など興味がないから。

けれど他人――――とくに異性に、好かれることが多いのは事実だ。
いっそ、この顔が好みだという理由のほうがいいのかもしれない。
もしそうならば、焼いてしまえばいいのだとあっさり思えるからだ。
そもそも、こういう事態にならぬように自ら噂になるよう行動し、
折をみては侍女の姿で噂を流したのに、本当にどうしてこうなった
のだろうか。

肺を満たす少し冷たい空気に、レオナの意識は覚醒し始める。
ぼんやりとした視界に入ってきたのは、薄いレースを何重にも合わ
せた天幕だ。
さすがに毎日それを見ているせいか、すぐこの天幕が自室のベッド
のものだと気がつく。
そして背中に触れる滑らかなシルクのシーツを感じ、改めて自分は
今ベッドに横になっているのだと知った。

「……」

ふと違和感を感じる。
背中に感じるシーツの感覚が、柔らかなベッドのその感覚が、ドレ
スを着ているにしては直接的すぎる気がする。
今日着ていたドレスは背中は開いていないデザインだったはずだし、
そもそも……。

「気分はどうだ？」

いきなり横から声をかけられて、レオナはか細い悲鳴を上げる。
てっきり一人だと思っていたが、傍にいてくれた者がいたようだ。
いったい誰がと思い、その人物に視線を向けてさらに驚いた。

国王が座っていた。

驚愕に目を見開くレオナに、国王は淡々とした視線を送るばかりだった。
人工の明かりの下では少し赤みがかる国王の金緑の瞳からは、なにも読むことはできない。
とにかく今寝ている場合ではないと判断したレオナは、けだるさの残る体をゆったりと起こした。

その拍子に、ベッドのそばに置かれた白いものが目に入る。
それは毎日自身が身につけるもので、締め付けがきついと呼吸がままならない代物。
今日だって締め過ぎて意識が遠のいたはずではないか。

そこで、はたと気がつく。
今自分は、とても呼吸が楽だ。
締め付けるものなど一切ないほど、自然体だ。

つまり、あのコルセットは……。

いやそんなまさか、恐る恐る自分の体に視線を送る。
緩やかな黒髪が覆う肩は、深い藍色のマントがかけられていた。
これは、国王が身に着けていたものだったと記憶している。
実際彼をちらりと盗み見れば、やはりマントをしていなかった。

マント越しに、自らの手をそっと体に這わせる。
どこもかしこも柔らかくて、絞められたコルセットの感触など一切ない。
それはまさしく、疑惑が確信に変わった瞬間。

羞恥のあまり気絶したいと望んだが、皮肉にも呼吸が楽な今は、そう上手く意識が途切れてくれることはなかった。

動き始める噂？

【側室レオナ・フライト】とは如何なる人物か？

と問われれば。
その姿見だけならば、堂々と咲き誇る薔薇のような美女、と城にいる人間はいうだろう。

どこか儚い印象を与える、腰まで伸びた艶やかな黒髪。
対象的に華やかに整ったその顔立ちは、吊り目がちな瞳によって勝気な印象をも他者に与える。
見渡す双眸は瑠璃色だ。

女性特有の柔らかな丸みを帯びている、ほっそりとした小柄な体。
白い喉から紡ぎだされる声は、見事なソプラノだ。
常にきっちりと施された化粧と、煌びやかな衣装を隙なく身につけている。
なにより他者に媚びるような甘ったるい頬笑みが、一番印象深いだろう。

一方で、その内面は聡いとはとてもいえぬ側室だともいわれている。
政治の話になると、困ったような顔をすることが多く、わからないとわんばかりに口数が減るからだ。
その場の空気にそぐわぬ発言だと、判断ができないことも多々ある。
総評すると妖艶さだけが魅力の、おつむの弱い着飾り側室。

その彼女が半刻も経たぬ前には、血の気を失い泣きそうな顔をし、今は真っ赤になって俯いている。
ドレスを脱がされ、あまつコルセットすら外されたことが心底恥ずかしかったらしい。
羞恥で小さくなっている彼女を、誰があの噂の側室だと思うだろうか。

そんなレオナを見兼ねて、ここに運んでくる際、レオナ本人が苦しいと呟いたからの処置だったとクライストは告げる。
相変わらず真っ赤に頬を染めたまま、レオナは申し訳なさそうに謝るばかりだった。
倒れたあとで気が弱っているのか、もしくは混乱しているのか、いつもの国王クライストに対する態度よりよっぽどしおらしい。

「陛下、そろそろ夜会に戻られませんと…」

淡々とクライストに見つめられることに居心地の悪さを感じたのか、レオナから切り出してきた。
まっすぐにレオナを見るクライストの視線とは対照的に、彼女の視線は少し伏せられ困惑の色がにじみ出ている。

これは自分と彼女との温度差なのだろうかと思えば、なんだか面白くなかった。

彼女に好かれている、などとは思ってはいない。
レオナは自ら望んで側室になったわけではない、唯一の女性だと知っている。
だからレオナが王城に上がる前にいた修道院に戻りたがっているこ

とも知っているし、この一件で彼女の王族嫌いが断固たるものになったと推測も容易かった。
それでももう、クライストが正式な夫なのは事実だ。

「あの、陛下…？」

一言も返事をせず、身じろぎ一つしないクライストに、再度レオナが声をかけてくる。
相変わらず伏し目がちだったので、ちっとも面白くなかった。
いずれレオナと一度きちんと話をせねばならないと思いつつ、彼女が倒れたばかりの今はその時期ではない。
ようやくクライストはその腰を持ち上げた。

「戻る。貴女は今少し休まれよ」

廊下まで見送るというレオナを制し、クライストは部屋を後にしてまもなく気がついた。
自分の体から少し、薔薇の匂いがする。
彼女が漂わせていた香りが移ったようだった。
美しい花にはトゲがあるというが、まさにレオナそのものだと思う。
一見クライストを受け入れているようなレオナだが、その内には一歩たりとも入れさせぬと拒絶のトゲを生やしている。

「すまない」

ぽつりとクライストが呟いた。
誰に伝わるわけもなく、言葉は廊下の暗闇に吸い込まれていった。

噂される以前の彼女？

すべてのはじまりはそう、間違いなく7ヶ月前。
何気ないダリルとの会話が、こうなる事態を予想できた最初で最後のことだったと思う。
あのとき、もう少し思慮すればよかったのだ。
後悔は止まらない。

けれど身勝手ながら今は、そうならなくてよかったと思う自分もどこかにいる。
クライストにとってレオナが、心のうちに潜むもう一人の自分なのだと気づいてしまったからだ。

それは渇望する自由を象徴するものであり、閉塞に苦しむ象徴であり。
宿命に打ちのめされるひ弱さでもあった。

――――――7ヶ月前。

まもなく日が落ちる。
熟れた果実のような夕日が、王城の最上階に位置する国王の執務室を赤く染め上げている。

室内には二つの人影。
国王であるクライストと、国務大臣のダリルだった。
本日の業務をすでに終了しているダリルとは違い、クライストはせっせと寄せられている報告書らと向かい合い、十分に考慮しつつサインと国印を繰り返している。
必要最低限の業務はクライストとて終わらせているが、よりよい国作りのためにはいくら時間があっても足りないのだ。
そんなクライストをよそに、ダリルは本来応接用の向かい合わせに置かれているソファーにどっかり座り、手にしていた書類に目をやっていた。
ところどころに美しい娘たちの写真が挟み込まれている。
「侯爵家のファルマ嬢とリディル嬢、お――…男爵家のセリア嬢もか。さすが国王陛下様、集まる女も一級品だ」
「何の話だ？」
クライストは確認している書類から目を離さず、淡々と問う。
「何のって…、おまえの側室候補」
「…ああ、宰相が勝手に話を進めているやつか」
「まるで他人事だな、淡白な反応なこって」
「私自ら望んだことではないしな」
相変わらずクライストは一瞥すら寄こさない。
側室のことより、手元の書類のほうが大事なようだ。
そんなんじゃ側室たちのほうから愛想尽かされるなと、容易い想像にダリルは静かに笑い、さらにページを進める。

さすがに側室候補とあり、どの娘たちも綺麗に着飾った写真ばかりだった。
鮮やかなドレスをまとい、品のいい宝石をつけて、それでいて淑やかそうな笑顔を貼り付けている。

そんな華のような候補に囲まれた、黒い娘が一人。
飾りっけのない黒い服を着込み、土いじりをしている写真が一枚だけの彼女。

「お、一人毛色の違う娘が混じってるな」
「…そうか」
「修道女だな、この娘」
「修道女？」

さすがに書類に走らせる手を止めて、クライストは視線を上げた。

この国で修道士や修道女とは、清貧・貞潔・服従を掲げた生活をしている者たちを指す。
また姻戚にしばられることはなく、彼らは異性と婚姻関係を結ばないのも特徴だ。
とくに婚姻については、『本人が望まねば、何人も穢すこと許さず』と法律でも定められている。
なのに国王の伴侶候補とはいえ、名が挙がっているという。

「なぜその修道女が選ばれた？」
「ん――…ああ、血筋だな」
「血筋？」
「先々代のじーさんが生ませた子らしい。母親は村娘らしいな」
「…なるほど」

けれどもとより無欲な彼らだ、向こうからこの話は蹴ってくるだろう。
法で守られていることもあり堂々と拒否しても問題ない、気にすることはないだろう。
そう思ってクライストは書類に視線を戻す。

その日も変わらない一日が終わろうとしていた。

その1ヶ月後、クライストの判断は外れ、その修道女は王城に上がることになる。
あっさりと修道の道を捨て、側室としてやってきたといわれた彼女が、あの噂まみれの【側室レオナ・フライト】になり果てるのはそう遠くない未来のこと。

噂される以前の彼女？

フォレスタ国の北西に位置する小さな村の修道院で、レオナは静かに生きていた。

朝、日が昇ると同時にレオナは起き出す。
着替えを済ませると、サイドテーブルに置いてある十字架に朝の祈りを捧げる。
その後他の修道女たちと礼拝堂にてミサを行い、簡単な朝食を済ませる。

午前中は、教会の講堂で村の子供たちに読み書きを教えるのがレオナの仕事だ。
さまざまな年齢の子供たちがやってくるので、かなりに忙しいが楽しくもある。
昼食と昼の祈りを済ませた午後は、教会の裏手にある農場で畑の世話をする。
やがて日が暮れると修道院に戻り、晩の祈りを捧げ夕食をとる。

とても華やかとはいえない質素で清貧な生活。
雅なドレスもなければ、化粧することもないが、それでもレオナはこの生活が好きだった。
ある種依存していた、といっても過言ではないだろう。
そしてこれからもずっと続く生活だと、疑いもしなかった。

その思いに亀裂を入れたのは、ある日突然送られてきた封筒。

院長室に呼ばれたレオナは、その封筒を受け取る。
裏返してみると、獅子をかたどったデザインの蝋印。
たまに見る、王都から送られてくるものと同じものだった。

こんな田舎暮らしの修道女に、一体何の用だろうか。
そう思う一方で、なんとなくその内容を察してしまう。

レオナは、自身が先々代の王の血を引いていることを知っている。
毎日毎日飽きもせず、母親に気が狂うほど言われて育ってきたからだ。
けれどあくまで、数多くいる先々代の庶子の一人。

では今になってなぜか。

その答えもすぐに察した。
間違いなく現国王が原因だろう。
2年前に即位したという若い王は、いまだに王妃を娶らず側室すらいないと聞く。
それが最近になってようやく、数人の側室を迎えるらしいという。

古い歴史のある国は、血統を大事とする。
とくに王族の、国王になるべき人物は直系に近いものがいいとされる。
フォレスタもその例外ではない。

つまり、年齢的にもちょうど良かったレオナは買われたのだろう。
この身に流れる、憎々しい先々代の王の血を。

自身の推測を確かなものにするために、レオナは院長から受け取ったペーパーナイフで封を開ける。
几帳面に折られた書簡を取り出して広げ、静かに目を通した。
ずいぶんと仰々しい言葉ではじまっていたその内容はやはり、レオナが推測した通り、国王の側室として王宮に召し上がれとの御達しだった。

「レオナ、なんて書かれてあったの？」

書簡を手に微動だにせずにいたレオナに、院長が声をかけてきた。
院長もレオナが王族の血を引いていると知っている。
ある程度は察しがついているに違いない。
レオナは持っていた書簡を院長に差し出した。

「どうぞお読みになってください」

書簡を受け取り、院長は目を通す。

「貴女に、側室として城に上がれと…。明日使者の方がみえるのね」
「そのようです。けれどわたくしは修道女ですから、このお話はお断りさせていただくつもりです」
「貴女がそういうなら、私からはなにもいわないわ」
「…すみません、ご迷惑をかけて」
「まあ、おかしなことを。なにも迷惑なんてかかっていないでしょうに」

俯くレオナに、院長は柔らかい笑顔を向ける。
そっとレオナの頬に手を当てて、その視線を合わせる。

「ねえレオナ、そんな顔してないで笑ってちょうだい」

「……」
「とびっきりの美人がもったいないわ。私、笑っているレオナが好きよ」
ここは、この修道院はようやく見つけたレオナの居場所だった。
ずっとこの場所でこの先も生きていくのだと、安心していた。
やっと解放されたと思っていた。
けれどどうにもこの体に流れる血は、それを許す気はないらしい。
レオナは上手く笑おうとしたけれど、顔が泣きそうにばかり歪んでしまった。

噂される以前の彼女？

太陽が一番高く掲げられている時刻、レオナが暮らす修道院に王都からの使者だという男が到着した。
４頭の馬で引く馬車は、このあたりでは見たことがないほど立派で大きな作りだった。

馬車から下りてきたのは、意外にも年若い男。宰相の私兵団団長だという。
ゼルフと名乗ったその男の背後には、２人の団員と思われる男が控えている。
穏やかそうな優男風の顔立ちだが、その視線は冷ややかだ。

修道院の前で出迎えていたレオナは、ゼルフの寄こす視線に身を震わせていた。
あの瞳には底知れぬ迫力がある、あまり関わるべきではないと本能が警告しているようだった。

挨拶もそこそこに、レオナは彼を応接間に案内する。
向かい合わせのソファーの奥にゼルフは腰を下ろした。
その間にレオナは紅茶を淹れ、内密に話がしたいと言われたので人払いも済ませる。
ようやく彼女がソファーに座ったのを確認し、早速ゼルフは切り出してきた。

「レオナ様にはご側室として、必ず城に上がっていただきます」
ずいぶん強い口調でいわれれば、レオナは一瞬呆気にとられてしま

った。
けれどすぐさま呆けた顔を引き締める。
このまま流されてなるものかと、レオナは膝の上に置かれた手で握り拳を作った。

「わたくしは修道女にございます。たとえお相手が国王陛下様といえど、婚姻関係を結ぶ気などございません」
「申し訳ございませんが、レオナ様に上がっていただくことは決定事項です。たとえレオナ様ご本人からの異論だろうと、認められません」

帰ってきた言葉に驚愕する。
そういってのけたゼルフは、至極にこやかながら目が笑っていなかった。

レオナの背筋に冷たいものが走る。
得体の知れない恐怖が、心の底から沸き起こってくる。
けれど今ここで絶対に負けるなと、必死に自分に言い聞かす。

「……決定事項と申されましても、国の法律で拒否することは認められているはずです。わたくしが望まぬ限り、王城に上がることはないかと」
「ええまあ、それはそうです。さすが修道女様々といった清い反論ですね。では逆に…」

なにがおもしろいのか、ゼルフはくすりと笑う。

「レオナ様が望んでくだされば問題ない、ということですよね？
ご側室として召し上がっていただける、と」
「わたくしは、このような婚姻は望みません」

「ならば望んでいただきましょう」
「ですから…！」
そんなつもりはないのだと、レオナは少し語尾を荒げる。
ゼルフは変わらず、にこやかに笑っていた。
レオナの首を縦に振らせるなど、容易いことなのだといわんばかりのその顔。
「レオナ様自ら望んでいただけぬのならば、この修道院を焼き払います」
「……は？」
よく聞き取れなかった、そう思うことにする。
だからレオナはただ、目を見開いてゼルフを見るばかり。
「足りないようでしたら、修道女の皆さまの御命もいただきましょう」
「……なにを…」
「それでもまだ首を縦に振っていただけぬようでしたら、この村を村人ごと焼き払いますが」
「なにを馬鹿なことを…！」
思わずレオナは立ち上がる。
激しく憤っている彼女を前にしても、ゼルフはその態度を一切乱さなかった。
それどころか一層にこやかに、彼は笑うのだ。
そこには『これは脅しではなく、本気だ』という意思が見え隠れしている。
「いかかでしょう、レオナ様？」

きっとゼルフは、レオナを王城に召し上げるだろう。
否、間違いなく彼は実行する。
それこそどんなことをしても、だ。

ゼルフは的確にレオナの弱みを突いてくる。
けれどレオナにはどう反撃すべきかわからない。
つまりは、従うしかないということ。

「…わたくしにそんな価値などありません」

レオナは苦し紛れにそう呟く。
これが彼女にできる、最後の抵抗だった。

「その判断を下すのは、残念ながら貴女ではありません。もちろん私でもありません」
「……」
「もう一度お聞きします。城に上がっていただけますね？」

苦々しい思いで、レオナはゼルフを睨みつける。
そしてこんな血を引いてしまったばかりにと、彼女は自身を呪うしかなかった。

なにが先々代の王の血だ、尊い王族の血なんだというのだ。
物心ついたときからずっと、苦痛しか与えてこなかったくせに。
一体どこまで縛りつければ気が済むというのか。

修道院を盾に取られ、法を逆手に取られ、いよいよ逃げ場などないのだと気がつく。
レオナは唇を噛み締め、頷くしか出来なかった。

噂される以前の彼女？

生活必要品しか持ち合わせていなかったレオナの荷造りは、話が決まってからほんの1時間もせぬうちに済んでしまった。
たったトランク2個分の手荷物しかない修道女が、これから側室として王城に上がるというのだから世の中わからない。

一応着替えとしてドレスもお持ちしてますが？とゼルフに問われたが、もちろんレオナは突っぱねた。
今着ている服はいつもと同じ、修道衣として支給されいる黒のワンピースだ。
頭から被ったベールは、腰辺りまで滑らかに垂れている。
修道女でいることが、買われることを受け入れるしかなかったレオナの最後の誇りだった。

ゼルフによって、修道院の外に止まっている馬車にレオナのトランクが運び込まれる。
けれどたった2つだけだ、それこそ瞬く間に終わった。

そして他の修道女たちに挨拶をする時間もなく、レオナも馬車に乗せられる。
院長にはすでに話を済ませてあるから心配はいらないと、ゼルフは言った。
向かいの席に彼が座ると、馬車は緩やかに走り出した。

そういえば、出迎えたときゼルフの背後にいた2人の男はどうしたのだろう。
そうレオナは思ったものの、いちいちゼルフに問うのも躊躇われる。

…まあ、気にかけるほどでもないだろうと思い直すことにした。

レオナがぼんやりと窓の外を眺めて始めてから、さほど時間は経っていなかったと思う。
揺れる馬車の中、ふと感じる違和感にレオナは眉根を寄せる。
焦げくさい、そう思った。
それから火のはぜるような、そんな音。

同乗しているゼルフは何の反応を示さないところから、最初は気のせいだと思った。
けれどいつまで経っても音は止まず、むしろ大きくなっているとレオナは気がついた。

そして突然、閃いてしまった悪い予感。
途端にレオナの手が、震えだした。
それは全身に広がって、止まらない震えに歯が鳴る。

もう一度、レオナはゼルフを見た。
今度は少しばかり口の端が持ち上がっているようだ。
その様子にレオナは確信してしまった。

しっかりと閉じられていた窓を開け、身を乗り出す。
走ってきた方向に目をやれば、レオナの呼吸が止まった。
当たってしまった予感に眩暈を覚える。

それは、空を焼きつくさんばかりの炎だった。
黒煙が立ち上り、業火の中で揺らめく建物の影。
はぜる合間に聞こえてくる、女たちのか細い悲鳴。

「どうして…」

レオナは眼前の光景が信じられない。
まさしく唯一の居場所だった修道院が、中にいたであろう修道女もろとも、燃え盛る炎に飲み込まれていた。
窓枠を掴む両の手に力が入り、やがて爪にひびが入って出血したが、痛みなど感じなかった。

……よくも。

レオナは溢れていた涙を拭い、車内に視線を戻した。
のうのうと向かいに座った仇であろう男に、一矢報いようと左手を大きく振りかざす。
そのまま勢いを乗せて振り下げたが、寸前に手首を掴まれてしまった。

ゼルフと目が合う。
やはり穏やかな笑顔を貼り付けている。
それがどれほど相手の怒りに油を注ぐ行為だと、彼は知っているのだろうか。

「すみません、痛いのは苦手なんです」
「城に上がりさえすれば、よかったのではありませんか！　なぜ修道院を！」
「心残りは少ないほうが良いかと、配慮したのがだいたいの理由で

すかね」
「ぬけぬけと…！」
激しいレオナの怒りなどなんのその。
ゼルフにとって憤ったレオナなど、子猫が爪を立てているのと同じくらいなのだろう。
実際、「ああ、そうそう」と続けたゼルフの口調は軽い。

「城につくまでの6日間、逃げ出そうだなんて思わないでくださいね。もし逃げようものなら、今度は村を焼き払います。修道院の一件で脅しではないと、ご理解いただけているかと思います。お優しい修道女様には耐えきれぬ所業でしょう？」
「……このっ、人でなし！」
「なんとでも。まあ、円滑に貴女を城に届けるための布石と思ってくだされば。私はただ楽に仕事をしたいタイプなんです」
「信用しろと！？　現に修道院に火を放ったのはどなたです！」
「レオナ様はまだ、ご自分の立場を分かっていらっしゃらないようだ。受け身になる他、許されていないのですよ」

ゼルフがようやくレオナの手を離す。
思いのほか強く握られていたようで、レオナの手首にはくっきりと手形が残っていた。
無能で力もない手だと、レオナはただ腹が立つ。

この体には本当に、誰かに望まれるほどの優秀な王族の血が流れているのだろうか。
先々代の王はとくに、秀でた才能で国をまとめ上げていたと聞く。
けれど実際は男一人にも抗えぬ、役に立たぬ血ではないか。
誰にぶつけたらいいか分からない怒りは、レオナを修道院から連れ

出す原因となった己の血に向けられた。

噂される以前の彼女？

６日後には到着予定だった王城への移動は、途中ひどい雷雨に見舞われ、その上王都目前の大橋が落ちたことで結局１ヵ月近くもかかってしまった。
ようやく修復した大橋を渡り、３時間も馬車が走らぬうちに王都が見えてくる。

最初その姿を見たときは、都ではなく城塞の間違いではないかと思った。
今まで立ち寄った町とはまったく違い、中の様子が窺い知ることが出来ないほど非常に高い石壁が四方を囲っていたからだ。
町と外とをつなぐ大門は、門兵が４人係りで開けるほどの相当な重量を誇っている。

一人馬車を降りたゼルフが、早々に門兵と話を済ませたらしい。
すぐさま通行の許可が下り、レオナたちを乗せた馬車はようやく王都内部に足を入れた。

重厚な石壁に囲まれた城下町は、それに反して非常に明るい活気で溢れていた。
昔一度王都に来たことがあったレオナだが、当時よりさらにその賑わいが増しているようだ。
王城に続く巨大な通りには露天商がそこかしこに店を広げ、大声で客寄せをしている。
食料品はもとより、衣類やアクセサリーなどもあり、その品揃えはさすが王都といったところか。

通りは白いレンガで舗装され、赤いレンガで統一された家がよく映えている。
道に沿うように樹木と花壇が間隔よく配置され、そこに咲く花々が目を楽しませてくれる。
どこか懐かしいような木柵が、たくさんの民が歩く歩道を飾っていた。

非常に整った街並みに改めて感心していたレオナに、ゼルフが声をかけてきた。
すっと心が冷えていく思いをそのまま、レオナは窓の外にやっていた視線を彼に投げる。

「さて、まもなく城に到着します。そこでようやく私の任務は完了です」
「それは、ようございました」
「本当にレオナ様が素直な方で、とても助かりました。こちらとしても動きやすかったです。おかげで村を焼かずに済みましたし」
「……さようにございますか」

ゼルフは相変わらずにこやかな表情を浮かべているが、その内はとんでもない非道さを隠していることをレオナは身をもって知っている。
焼け落ちていく修道院の様を思い出し、レオナは思わず身震いした。
けれど脅えられているのは百も承知だといわんばかりのゼルフは、そんなレオナににこやかに笑いかけるのだ。
その表情にすらレオナが脅えることも、彼はきっと承知しているだろう。

「ときにレオナ様」
「なんでしょう」
「正式に側室になった折、陛下に進言して私を処分するなどとお考えですか？　それだと私は確実に仕事を失うでしょうし、困るんですけども」
「…いいえ、そのつもりはございません」
「それは、理由を聞いても？」
「分かっておいでのくせに、あえて聞くなどタチが悪いというものでは？」
「いやだな、確認といってくださいよ」

そう言って、ゼルフは少し声をたてて笑う仕草をしてみせる。
３０代そこそこの落ちついた雰囲気と、甘いマスクは間違いなく異性を惹きつけるだろう。
アッシュブラウンの髪が、さらに柔らかい印象を醸し出している。
異性から熱のこもった視線を向けられることが多いであろうその顔を、けれどレオナは冷ややかに睨みつける。
ゼルフのオリーブ色の瞳の中にあるのは狂気か、はたまた。
改めて背筋を伸ばし、レオナは言葉を吐く。

「リスクが大き過ぎるからです」
「リスク、ですか」
「ゼルフ様はわたくしをよくご理解されているようで、それはわたくしが嫌うことも含まれていらっしゃる。今度は村を盾にするつもりでしょう？」
「さすがレオナ様、分かっていらっしゃいますね」
「城の随所に目と耳を光らせることが可能なゼルフ様と違い、わたくしにとっては王城は、誰が敵か分からぬところ。どこまでゼルフ様の手が回っているか分からぬ状況で、安易に行動して村を危険に

さらすわけには参りません」
「ずいぶんと賢い方ですね、そういうところは好きですよ」
あしらわれているような言い方に、レオナは心底腹が立つ。
けれどそれを顔に出すのも癪だし、こちらも釘を打っておくべきだと冷静に言葉を紡ぐ。
「けれどこの条件は諸刃の剣だということをお忘れなく。もし村を失うことにでもなれば…」
「それはご安心を。私は、私自身と仕事を全うすることにしか興味がありませんので。可愛い我が身に害をなす発言を控えてくだされば、なにもいたしません。あくまで村は保険です。まあ、お優しいレオナ様にとってはこれ以上ない保険でしょうけども」
「……」
「城に上がったあとのレオナ様は、私の管轄を離れます。城にお連れした経緯を進言するような真似以外でしたら、どうぞご自由に行動ください」
これ以上返答する気なれなかったレオナは、視線をまた窓の外に向ける。
いつの間にか城下町を過ぎていたようで、眼前に迫っていたのはこれぞまさしく要塞、と思われるほどの王城だった。
城下町を囲っていた石壁よりも高いその建物は、見上げるだけでも一苦労だ。
中央に建っている一番高い塔からは、獅子を模様が入った赤い布が垂れ下がっていている。
いくらか走ったところで、やがて馬車が止まった。
御者が降り、外から扉の鍵を外したのち、開けられる。

扉の先には、ずらりと整列した女性が頭を下げていた。
馬車の入り口に一番近いところにいた一人が顔を上げる。
女性らしい柔らかな印象な彼女は、他の女性と比べて質のいい制服を着込んでいる辺り、メイド頭か侍女なのだろう。

「長い道中、大変お疲れ様でございました。我々一同、レオナ様のご到着を心よりお待ち申し上げておりました」

慣れない仰々しい出迎えに、レオナはどう反応すべきか迷う。
そしてこの女性たちの中に、ゼルフの息のかかったものがいるかもしれないと思うと足が竦む。
彼によって修道院が焼き払われたトラウマは、確実にレオナの中に巣食っているのだ。

噂される以前の彼女？

側室として用意された部屋は離宮にあると言われた。
言ったのはレオナ付きの侍女を仰せつかったという、あまり年の変わらないような女性だった。
背の高さはレオナよりあるが、顔の幼さがまだ残っている。
赤みがかった金髪が魅力的な侍女は、アリーチェと名乗った。

いよいよ離宮に渡るための中庭だというところで、アリーチェは足を止めた。
レオナもそれに倣い立ち止まったが、どうしたのだろうと首を傾げる。
なにか忘れ物でもしたのかと思っていたが、どうやら違うらしい。
アリーチェはすぐそばの扉を開け、レオナに首を垂れる。

「離宮にお渡りする前に、こちらにてお支度をしていただきます」

支度？
なんのことだろうかと思いつつ、とりあえずレオナは素直に部屋に入る。
そこにはすでに3人のメイドが控えており、レオナの姿を確認すると別室に続くドアを開けた。
若干湯けむりが漂うそこは、バスルームに続く脱衣所だった。

浮かんだ疑問を彼女らに問うまもなく、レオナは着ていた修道衣を脱がされる。
悲鳴を上げるレオナなどなんのその、そのまま丸裸にされた彼女は3人の手によって見事に磨かれることになった。

肌が剥けたんじゃないかと思うくらいの垢擦りを終え、緩やかなバスローブをまとわされたレオナは、さらに別室に案内させられる。
どうやら寝室だったようで、見事にベッドメイキングされたそこに座って待つように促され従う。

まもなく現れたのは、ずいぶん年を召した老婆だった。
着ている服を見て助産師だとすぐに気がつく。
ベッドの上のレオナを見るなり寄ってきて、「すぐに済みます」と手を伸ばしてきた。

あれから支度と称した身支度が終わり、ようやくレオナが案内された部屋は、離宮の奥の一室だった。
修道院にあったレオナの部屋の、優に１０倍はあろうこの広さ。
しかもこの一室だけではないというのだから、贅沢だ。

白と薄い空色を基調とした落ち着いた雰囲気の部屋には、品のいい家具が配置されていた。
歩いても軋むことがない大理石の床には、踏むのがもったいないくらいの上等な絨毯。
天井が非常に高く、見上げた先にはシャンデリアがぶら下がっていた。
窓は大きく作られていて、日の光が存分に部屋を満たす。

部屋に入るなり、レオナはアリーチェに一人にしてほしいと告げた。
もういろいろと限界だった。

憔悴しきったようなレオナに、なにかあればベルを鳴らしてくださいというと、彼女は隣の侍女部屋に大人しく下がった。

扉が閉まる音がして、レオナはその場にへたり込む。
ようやく一人になったと安堵すれば、よくわからない涙がこみ上げてくる。
今まで生きてきた中で、見たこともないくらいの立派な部屋でレオナはすすり泣く。
さきほど受けた屈辱的な行為を思い出せば、いよいよ涙が止まらなくなった。

あのとき伸びてきた助産師の手で、レオナの体は無理やり暴かれた。
抵抗する四肢はメイドたちに抑えられ、側室として上がるには誰しもが受けることなのだと助産師は言った。
耐えきれぬ行為にレオナは悲鳴を上げ、そしてもう修道女としての誇りも失ったのだと感じた。

ようやく視察が済み解放されたレオナに待ち受けていたのは、派手なドレスを手にしたアリーチェだった。
お疲れ様でございましたといった彼女は、レオナがどんな目に遭ったのか察しているようだった。
アリーチェの持つドレスを一瞥したが、派手すぎてとてもレオナの好みではなかった。
けれど、だからといってもう修道衣を着ることは許されないような気がした。

ふとレオナは顔を上げる。
そばに置いてある姿鏡に、モスグリーンの鮮やかなドレス姿の自分が映っている。

したこともない化粧も施された今は、きっといつもより綺麗なのだろう。

そしてこれから側室として、この国の王に仕えるのだ。
無論華やかな生活もできよう。
側室として与えられる地位も名誉も、今までのレオナには天と地の差だ。
夫となる国王は、賢王と謳われるほど素晴らしい人物だと聞く。

そうだ、なにを嘆くことがある。
なにを憤ることがある。
これは喜ぶべきことではないか。
泣くならば、その幸せを理由にすべきだ。
そう必死に言い聞かせる。

けれど、どうしてどうして。
レオナの心を占領しているのは、この理不尽な現状など受け入れられぬという怒りと悲しみだけという。

「帰りたい」

レオナは現実に耐えきれず、ぽつりと漏らす。
でも、どこに？
唯一の居場所だった修道院は焼けてしまったではないか。

「帰りたい、帰りたい…」

帰る場所なんてもうどこにもないのに、どこに帰ろうというのだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8235z/

噂の側室

2012年1月8日00時15分発行